火と舞の伝統

奉納される獅子舞は、人吉の青井阿蘇神社を源流とし、嘉島町六嘉を経てこの地へ伝わったとされます。仕掛け花火を用いるなど、他に類を見ない独自の進化を遂げた砥川奉納獅子舞。地域に受け継がれる伝統・文化をひもときます。

獅子と子どもたちが作りあげる壮大な舞台

「トーハイハイトーハイハイ…」。獅子舞に合わせて奏でられる祭りばやし。笛と太鼓の旋律にいざなわれ、獅子が舞台を所狭しと舞います。

砥川の獅子舞は、山から下りてきた獅子を鎮め、山へ返すという物語。赤の雄獅子と緑の雌獅子が交互に登場し、やがて二匹が交わり幻想的に舞い踊る「もやい獅子」が最大の特徴です。疫病退散を祈願して始まったと伝わりますが、その情熱的な舞は子孫繁栄の願いをも感じさせます。

今年の獅子頭中林貢さんと花火頭塩山剛さん

獅子と対峙するのは、地元の子どもたちです。鈴の音で獅子を誘い手なずける少女「釣子」と、竹の棒で暴れる獅子をいさめる少年「花棒」。地域の子どもたちがこの大役を担い、獅子と共に舞台を作り上げます。

祭りは一日がかりです。日中に民家で舞を披露する「出立ち」を終えると、一行は砥川神社を目指して町を練り歩き、神社の境内が、昼・夜の部の舞台となります。

そして、熱気が最高潮に達するのが夜の部。鳥居、楼門、拝殿に仕掛けられた花火を獅子が次々と「食いちぎり」、舞の合間には夜空を彩る打ち上げ花火が上がります。

クライマックスの「もやい獅子」では、雌雄の獅子が激しく舞い狂い、滝のように降り注ぐ花火の火の粉を浴びながら固く抱き合います。

花火と獅子が織りなす壮大な光景は、まさに圧巻です。会場を包む観客のため息と歓声が、他に類を見ないこの祭りの真価を物語っています。

祭りを担う地域とそれを支える重鎮

この祭りは「上砥川」、「中砥川・下鶴」、「下砥川・新川」という三つの地域が、年ごとに交代で運営を担う担当制。今年担当する「下砥川・新川」は、地震やコロナ禍を乗り越え7年ぶりの大役となります。

担当地域は、舞手となる子どもたちの選出から、運営、舞台設営、獅子回し、花火に至るまで、祭りの全てを取り仕切ります。「獅子頭」、「花火頭」といった責任者も、その地域の住民が務めます。

しかし、担当地域だけでこの伝統が守られているわけではありません。その運営を陰で支えるのは、地域の垣根を超えて集まる重鎮たち。自身も幼い頃から祭りに親しみ、今では子や孫の世代に舞や演奏の指導をしながら、祭りの根幹を支えています。

砥川獅子舞保存会・森田眞一会長もその一人。「先輩から受け取ったタスキを、僕らが次の世代につなぐ番だね」

砥川獅子舞保存会　松永修一さん、作永重光さん、森田眞一会長、藤島朝利さん

10月17日に執り行われる大祭神事

砥川獅子

獅子舞奉納日の流れ

午前8時　準備

午前11時30分　出立ち

出立ち後　道ゆき

午後2時　昼の部

午後6時　夜の部